

# 特別支援学級における交流及び共同学習に関する実態調査 ～交流及び共同学習の形態に焦点を当てて～

## Research on Exchange and Joint Learning for Pupils of Special Needs Class

星野 謙一<sup>1</sup> 佐藤 慎二<sup>2</sup>

知的障害及び自閉症・情緒障害特別支援学級における交流及び共同学習に関する現状と課題を明らかにすることを目的に、担任を対象にアンケート調査を実施した。その結果、以下の諸点を指摘した。①ねらいとして、人間関係の形成や異なる環境への適応といった項目に重点を置いている。②手立てとして、交流学級担任との打ち合わせや共通理解を図る点が重視されてきている。③児童の意欲については、交流学級児童を迎える形態の方が高くなることが示唆された。④一方で、回答した多くの担任が打ち合わせ時間の確保などの課題を指摘した。

キーワード：交流及び共同学習、アンケート調査、特別支援学級

### 1. 問題と目的

障害者基本法の一部改正（2004年6月）により、「国及び地方公共団体は、障害のある児童及び生徒と障害のない児童及び生徒との交流及び共同学習を積極的に進めることによって、その相互理解を促進しなければならない」と規定され、交流及び共同学習は重要な教育課題の一つとされた。しかし、その推進にあたっては様々な課題が指摘されている。独立行政法人国立特別支援教育総合研究所が実施した、交流及び共同学習に関する調査研究(2006)においては、○特別支援学級担任の付き添い、○交流相手との相互理解の推進の必要等が課題として挙げられている。

一方、山本・佐藤(2007)は、交流及び共同学習にはその展開の仕方によって、○生活年齢学年の交流学級との個別交流、○特別支援学級が主体となって展開する交流等の5つのパターンがあることを指摘している。しかし、先の研究所の調査研究では、形態毎による手立てやそこでの課題の差異については検討されていない。

そこで、本研究では、特別支援学級担任に対して

アンケート調査を実施し、形態毎の交流の様子や、手立て、課題等を明らかにすることを目的とする。

### 2. 方法

#### (1) 調査対象

調査範囲はY市とT市内の全ての小学校知的障害特別支援学級(\*以下、知的障害学級と略す)と自閉症・情緒障害特別支援学級(\*以下、情緒障害学級と略す)59学級を対象とし、第2学年の担任に調査を依頼した。その理由は、情報の整理・検討に際しての、○学校生活の経験年数による差異をさけ、○一方で、低学年段階の様子の把握を目的としたためである。

#### (2) 調査方法と回収率

(3)にある調査項目を記したA4用紙4枚の調査用紙を用意し特別支援学級担任に記入を依頼した。調査依頼から回収までの期間（平成22年9月～末日）は約一カ月とし、回収したアンケート用紙を集計分析の対象とした。回収率は49% (59校配布 29校回収)であった。

1 植草学園短期大学専攻科 特別支援教育専攻

2 植草学園短期大学

### (3) 調査項目

- 1 障害種 在籍児童数
- 2 交流及び共同学習の実施の有無
- 3 実施していない理由
- 4 交流及び共同学習を行っている人数
- 5 交流及び共同学習の形態
- 6 ～18形態毎の具体的な実施内容、手立て、評価の観点、課題等

## 3. 結果と考察

### (1) 学級数・第2学年在籍総数とその割合

回答のあった学級の約85%の学級(知的22学級、情緒2学級)において交流及び共同学習を実施していた。

第2学年在籍数総計44名のうち、交流及び共同学習を実施している人数は知的31名、情緒6名で84%あった。

### (2) 交流及び共同学習を行っていない理由

主な理由は「児童の実態からみて難しい」というものであった。その他は「転校してきたばかりのため」とあり、交流及び共同学習に消極的というよりは、児童の実態を踏まえて、実施していない様子が見て取れる。

### (3) 交流及び共同学習の形態

本調査では、交流及び共同学習を「児童が交流学級に行く」活動(以下、行く交流と記す)と「特別支援学級の活動に交流学級の児童を招く」活動(以下、招く交流と記す)の2つに分け、どのような交流活動を実施しているか調査した。(複数回答可)児童が交流学級に行って活動を行うことが多いという結果が得られた。その理由について調査対象としていないが、同学年で交流を重視する姿勢と特別支援学級での取り組みの中身(教科中心か生活中心か)にも左右されることが推察される。

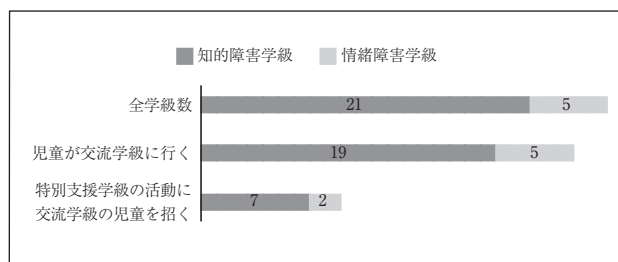


図1 交流及び共同学習の形態

### (4) 具体的な活動内容

「児童が交流学級に行く」と回答があった場合を対象に実際にどのような活動を行っているか回答を求めた。行事や給食、集会等に参加している児童が多かった。逆に国語や算数等は少なかった。児童の実態を考慮した上で、参加しやすい活動を判断した結果と思われる。教科の中でも、国語・算数等比べて、音楽や生活、体育が多いのも実態からみて比較的参加しやすいと判断したものと思われる。

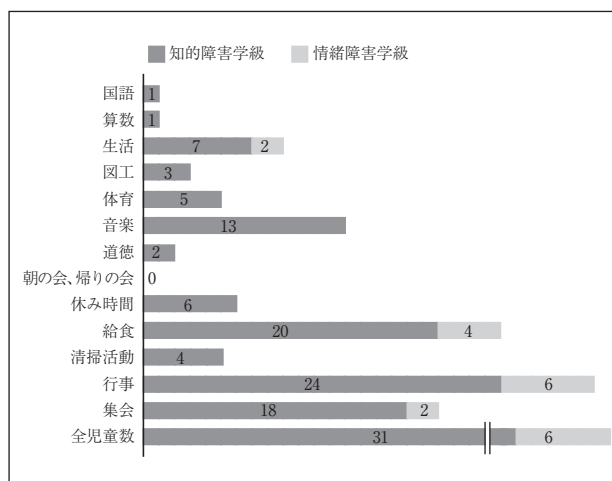


図2 活動内容

### (5) 実施にあたっての手立て

実施にあたってどのような手立てを行ったか回答を求めた。(複数回答可)

活動内容に応じて参加を判断するとの回答が多く、児童の実態に応じて、無理ないように実施している様子が伺える。また交流学級担任と授業内容やねらいの共通理解をするという回答も多く、事前打

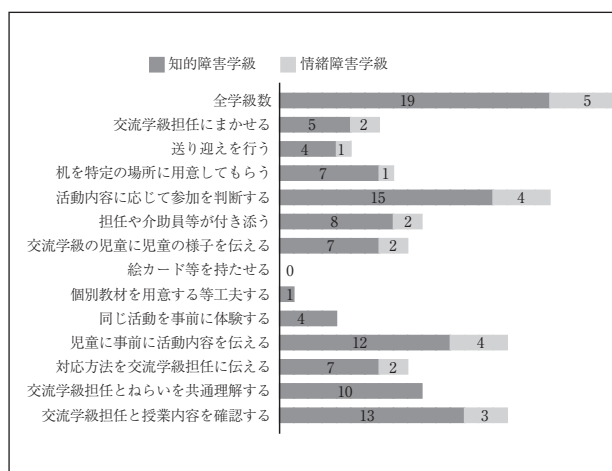


図3 実施にあたっての手立て

ち合わせの重要性が示唆された。また、児童に活動内容を事前に伝えることも重視されており、交流学級担任からの支援と合わせて児童本人への直接的な支援を大切にしている様子が明らかになった。

#### (6) 有効だった手立て

実際に手立てを行って有効だと感じた手立ての回答を求めた。(複数回答可)

12項目中9項目で、3項目で1名を除き全員が有効と回答した。担任は、児童の実態に合わせて有効な手立てを行っていることがわかった。

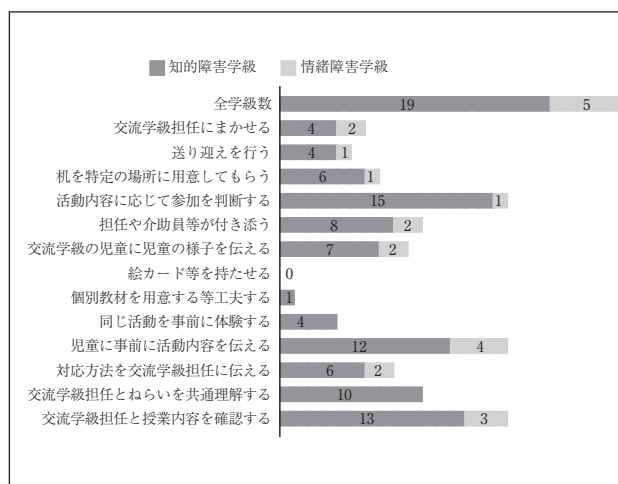


図4 有効だった手立て

#### (7) 評価について

交流及び共同学習について誰が評価をしているのか回答を求めた。(複数回答可)

交流学級担任と相談することも含め、特別支援学級担任が評価を行っている。

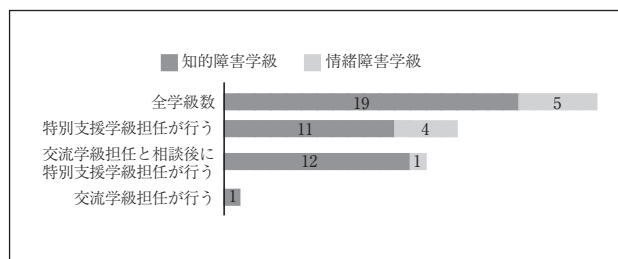


図5 評価について

#### (8) 評価の観点

評価をするにあたっての観点について回答を求めた。(複数回答可)

参加した活動によってもその観点は当然違うことが示唆されるが、概ね、教科の目標を達成することよりも、人間関係の形成や異なる環境でも適応的に

活動できる等の社会性・対人関係に関する領域に重点を置いていることが明らかになった。

研究所による調査(2006)や山本・佐藤(2007)でも同様の傾向がしめされており、教科・単元等における共同的なねらいの達成が求められつつも(全国特別支援推進連盟2007)、現実的には社会性に焦点をあてて、交流及び共同学習が展開されていることが示唆される。

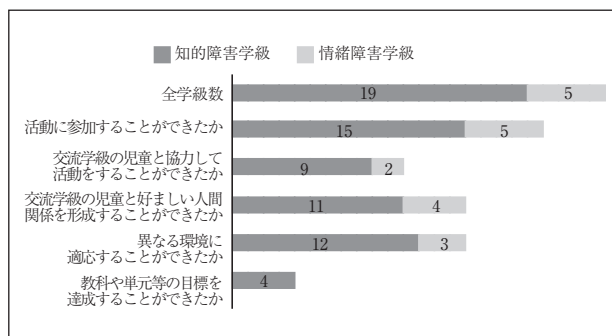


図6 評価の観点

#### (9) 児童の様子

実際に交流及び共同学習に参加した際の児童の様子について回答を求めた。

未回答が2校あったが、約40%がどちらとも言えないと評価している。どの担任も手立ての有効性を指摘しつつも、実際の子どもの様子に関してはその評価を保留する姿勢が伺える。

これは、行く交流の場合は、担任として直接的・間接的に尽くせる手立てに限界があり「この子どもはもっとできるのではないか?」という評価である可能性も示唆される。さらに、詳細な検討が求められよう。

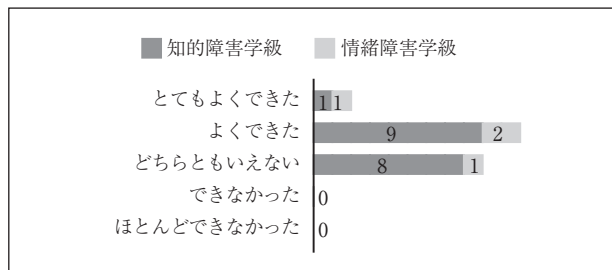


図7 児童の様子

#### (10) 課題

交流及び共同学習の課題について回答を求めた。(複数回答可)

課題はないとの回答は0で様々な課題を抱えてい

ることが浮き彫りとなった。交流学級担任との打ち合わせや実際の交流の様子も含めて、特別支援学級担任は多くの課題を感じている。先の(9)の結果も踏まえて検討するならば、担任は、○交流及び共同学習の意義・必要性を実感しつつも、○行く交流の場合は現実的には交流学級担任に任せざるを得ない部分が多く、○特別支援学級児童に直接的にも間接的にも手立てを尽くしきれないジレンマに陥っている様子が伺える。

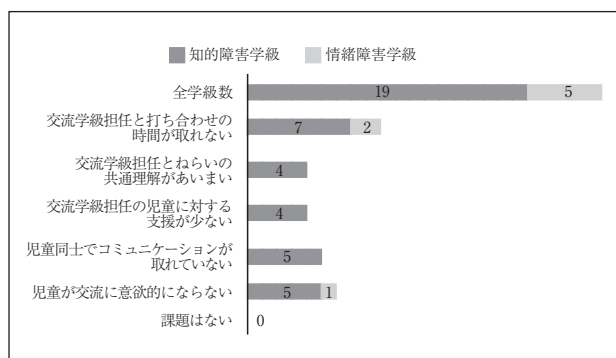


図8 課題

#### (11) 具体的にどのような活動を行っているか

「特別支援学級の活動に交流学級の児童を招く」と回答された方に具体的な内容について回答を求めた。(複数回答可)

やはり、行く交流と同様に、清掃や給食といった比較的参加しやすい活動が多かった。一方で、製作や活動と一緒に取り組む場合も多い。特別支援学級の児童の立場では、落ち着いた環境で交流できたり、児童が自信をもって活動できたりするといった利点が考えられる。

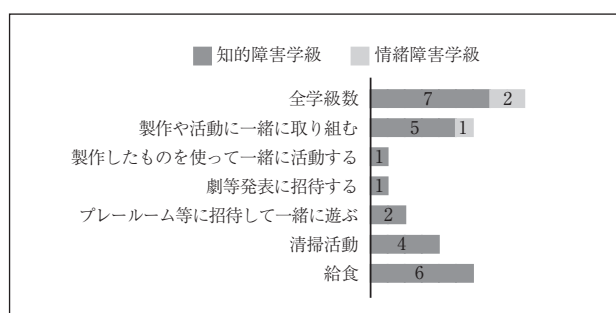


図9 活動内容

#### (12) 実施にあたっての手立て

招く交流の場合は交流学級担任との打ち合わせと共に、児童に事前に伝えるという手立てを重視していることが明らかになった。

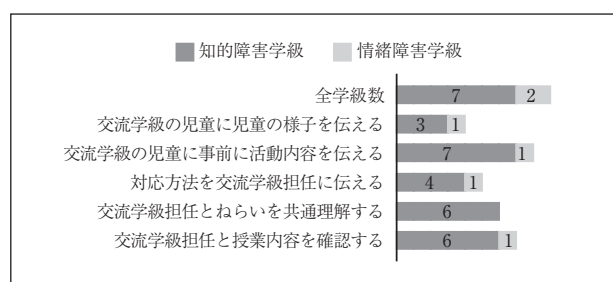


図10 実施にあたっての手立て

#### (13) 有効だった手立て

有効だった手立てについて回答を求めた。(複数回答可)

概ね有効であるという回答が多かった。

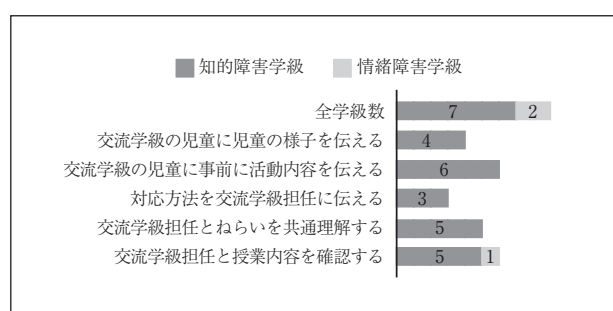


図11 有効だった手立て

#### (14) 評価の観点

評価するにあたっての観点について回答を求めた。(複数回答可)

招く交流の場合は行く交流に比べて、特別支援学級側の活動のねらいがはっきりしていることもあり、「教科や単元の目標を達成することができたか」の割合が増加している。

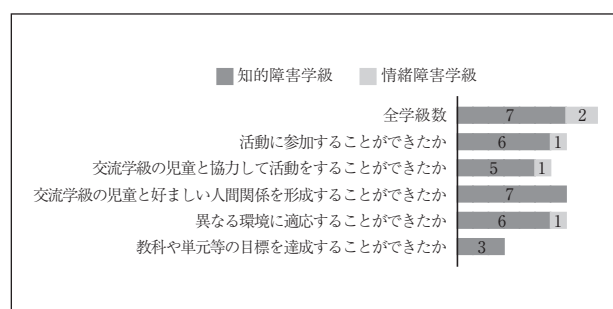


図12 評価の観点

#### (15) 児童の様子

活動の際の児童の様子について回答を求めた。行く交流に比して、評価は高まっている。特別支援学級児童が取り組みやすい活動を選定していることが背景要因として示唆される。



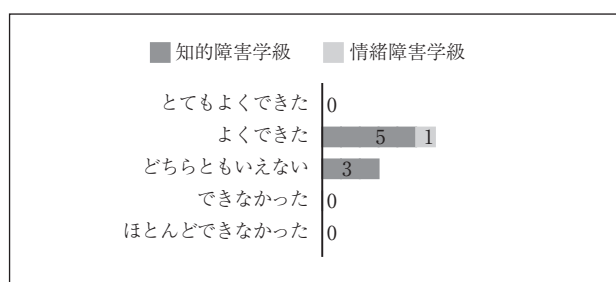


図13 児童の様子

#### (16) 課題

交流及び共同学習の課題について回答を求めた。  
(複数回答可)

招く交流の場合でも、行く交流の場合同様の課題が指摘されている。しかし、“児童の意欲”に関する指摘は、行く交流に比して減っている。また、課題はないとの回答も1名あった。招く交流の取り組みやすさが示唆される。

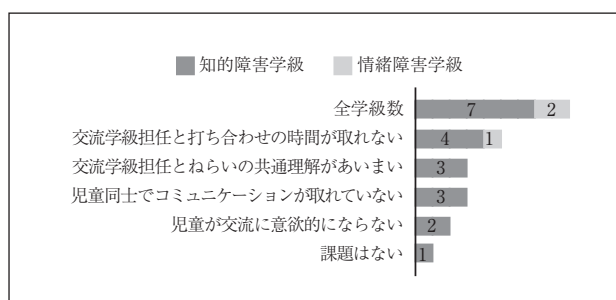


図14 課題

2、「行く交流」の場合よりも「招く交流」において、児童の意欲が高まっている点が示された。招く交流の場合には、特別支援学級の担任と児童がイニシアチブをとることになる。また、児童本人の取り組みやすさや担任としての手立ての尽くしやすさが背景にあり、児童の意欲が高まると考えられる。

3、「行く交流」の場合には、特別支援学級担任は手立ての有効性に触れつつも、児童の様子の評価は決して高くなかった。実際の支援を交流学級担任に任せざるを得ない側面が強く、特別支援学級担任が尽くせる手立てには限界があるという交流及び共同学習の限界が示唆された。

今回の調査では、形態別の評価を中心に行い上記の諸点が明らかになったが、回答するその背景や理由を問う設問が少なかったため、十分な考察が得られなかった。形態別による交流及び共同学習のありようには－手立ての尽くしやすさを含め－大きな差異が推察され、今後の研究課題としたい。

#### <文献>

全国特別支援推進連盟(2007):「交流及び共同学習事例集」  
ジアース教育新社

国立特別支援総合研究所(2006):「交流及び共同学習に関する調査研究」

山本亜希子・佐藤慎二(2007):平成19年度千葉県長期研修生研究報告書 補足資料「特別支援学級児童が通常学級でより主体的に活動する交流及び共同学習の一考察」

#### 4. 総合考察

今回の調査で明らかになった点は以下である。

1、交流及び共同学習を実施する際のねらい、手立てとその有効性、そして実際の課題に関しては、先行研究と同様の傾向が見られた。

